

鶴見文化財学会報

Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.13
2012年3月16日発行
鶴見大学文化財学会

文化財学科「100分の5」の魅力

小林 恭 治

2011年11月5日、文化財学会の秋季シンポジウムが開催された。その様子を「文化財学科ニュース」で紹介しようと、デジタルカメラで会場の様子を撮影したところ、画像のカウンターが9,999を越えていることに気がついた。

生涯学習セミナーの資料作成のためにカメラを購入したのが前年の7月末で、資料用には100枚も撮らなかつたから、9,900枚以上は、その後の1年3ヶ月で撮影した文化財学科の風景ということになる。単純計算で、毎日20枚以上の写真を撮っていたのだとすると、結構な量であるが、実力的には100枚撮って5枚、満足するものがあるかないかのレベルである。

そもそも、セミナー用写真の撮影後に、他にカメラを活用する道はないかと考え、思いついたのが、夏休みに実施される発掘実習の撮影であった。授業風景を写真で紹介することは、文化財学科のPRに繋がると考えたのである。

早速、宗臺先生にお願いして、取材許可をいただいたが、2010年の夏は大変な猛暑で、熱中症という言葉が一般に知れ渡った年でもあった。広報課から提供された地図を片手に、最初に現場へ向かったのは、炎天下の8月4日である。

考えてみれば当然だが、仕事をする人は、大抵、手元を、つまりは下を向いている。発掘実習では、さらに、日焼け対策として、長そで長ズボン、帽子にサングラス、首にタオルで、誰が誰なのか全く分からない。「学生たちの汗まみれの表情を撮るぞ」と勇んで女子寮の坂を登った私は、いきなり現実の壁にはじき返された。

それでも250枚ほど撮影し、後日、何枚かをお披露目したところ、加藤先生からパネルにしてはどうかという御提案をいただき、星野先生、戸田助手の3人で、小型のパネル十数点を作成したところ、河野先生がオープンキャンパスの際に、6号館の教室や廊下に展示して下さるようになった。

一方、石田先生からは、他の実習も取材してはと勧められ、続けて美術品取扱、保存科学、古文書修復、土器復元の取材をすることとなった。

文化財学科の実習は、どれもユニークで、私のような門外漢もやってみたくなるほど面白そうである。そんな実態を、科内の私が知らずにいたのであるから、他の部署の人たちも知らないのではないかと考

え、文化財学科の魅力を、まずは学内の人たちに広く紹介するために、写真をもとにポスターを作成し、紫雲祭で発表することを企画した。

日程的には厳しかったのであるが、学生課と実行委員の方々にお世話いただいて、なんとか会場を確保し、広報課の方のご好意でチラシを大学会館に置かせてもらえることもなった。

会場では、できるだけ多くのポスターを展示したかったが、スペース等の都合から、19点に厳選せざるをえなかつた。そして、それらにコピーを付し、B1サイズに拡大したものを大型プリンターで出力して、パネル化した。

紫雲祭の初日は、台風到来という生憎の天候ではあったが、最終的に、用意したパンフレットや絵葉書も粗方捌けて、まずまずの成果だった。

その後、学祭で紹介できなかった写真を、カレンダーにして6号館に掲示したり、図書館の掲示板を間借りしてギャラリーコーナーを常設するなど、PRの機会を増やせるようになり、2011年の紫雲祭では2回目のポスター展(全50点)を開催することもできた。

授業中の学生諸君、諸先生方には、随分とご迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、各位のご理解とご協力に深く感謝申し上げる次第である。お陰様で各方面の評判も良く、現在、新たな展開も検討中である。

写真撮影を通して、文化財学科の風景は、どれもビジュアル的で魅力があり、学生諸君の大学生活には絵になる瞬間がたくさんあることに気がついた。そして、そうした瞬間をどれほど見逃しているのだろうかと考えるようにもなった。

学科紹介を目的としているので、写真には授業内容を説明できるシーンが必要ではある。しかし、その魅力を伝えるためには、人目を引きつける何らかの要素がなくてはならないことにも気がついた。ポイントは、被写体となった学生諸君の目と手なのではないかと考えている。課題を見つめる視線と、作業する指先の表情である。

但し、私がおその瞬間を捕えられるのは、現在のところ100分の5の確率である。それが、その《瞬間》の出現率なのか、捕獲率なのかを検証するためには、次の9,999枚の結果が必要であると考えている。

文化財学会 春季大会・秋季シンポ関連報告

〈春季大会記念講演〉 「富士山を世界文化遺産に —信仰の山、文化創造の源—」

報告 3年 水落 絢香
2年 鎌倉 洋

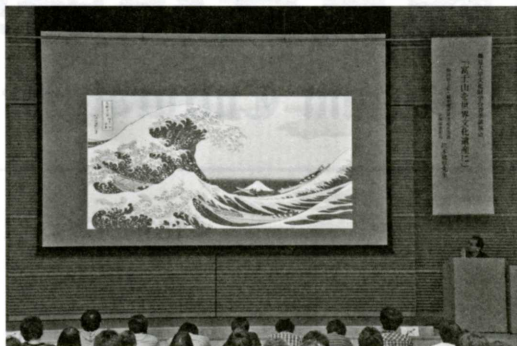
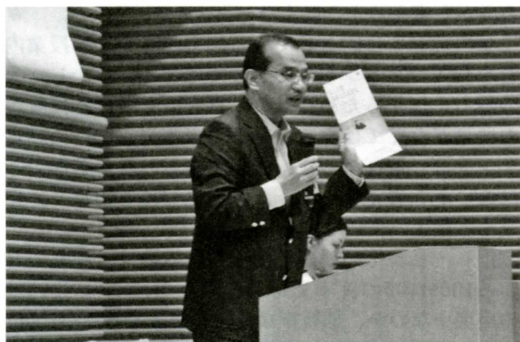
平成23年度春季講演会は、去る6月4日土曜日「富士山を世界文化遺産に—信仰の山、文化創造の源—」と題し、静岡県文化・観光部文化学術局世界遺産推進課学術調査班長の松本稔章先生にご講演いただきました。

世界遺産への登録手順は、まず当事国が暫定一覧表をユネスコに提出することに始まり、現在日本は平泉を含む14件を暫定一覧表に掲載しています。

富士山の世界遺産登録を目指す静岡県・山梨県と関係する7市町村は、第二段階として、推薦状原案を作成しています。平成23年7月末までに原案を作成した後は、審査を受けるために国が推薦状をユネスコに提出し、ユネスコは11月15日までに書類審査意見を示します。それを受けて、国は平成24年2月1日に正式にユネスコに推薦状を提出する予定です。

推薦状提出が順調に進めば、ユネスコ諮問機関ICOMOSは、平成24年夏に現地調査を行い、同年5月にICOMOSが世界遺産委員会に審査結果を報告し、富士山の世界遺産登録の可否がほぼ決定します。報告内容には、登録が適当であるとする他に、情報の追加（情報照会）、記載延期、不記載があります。

富士山の世界遺産登録へ向けた活動には、紆余曲折がありました。平成12年の文化審議会は、「富士山は文化的景観として評価でき、早期に調査を行い推薦すべき」、という意見を出し、平成15年の環境省・林野庁による検討会で富士山を自然遺産候補として



推薦する方針を決定しました。しかし、富士山は民間による土地利用が広範囲に及び、また登山道周辺のトイレやごみの不法投棄も問題となっており、推薦は見送られました。

このような指摘を受けて、山梨・静岡両県は、平成17年から文化遺産として富士山を登録する取り組みを始めました。平成19年に世界遺産暫定一覧表候補の国（文化庁）公募に応募後、平成20年に国際シンポジウム・意見交換会を、平成21年には国際専門家会議を開催し、現在に至ります。

富士山は、登る者の心を綺麗にするといわれ、信仰の対象となっています。また、富士山を題材とする様々な絵画や詩を生み出しています。

富士山は、『統日本記』・『万葉集』・『常陸国風土記』等に記載されています。なかでも、『統日本記』は、「富士山」という漢字を初めて使用して、最古の富士山の噴火記録を残しています。『万葉集』には、様々な当て字で富士山を詠んだ歌があります。山部赤人は富士山を「駿河なる富士」と詠み、高橋虫麻呂は「なまよみの 甲斐の国 うち寄する 駿河の国」と富士山の位置を正確に詠んでいます。また、最も早くに富士山を記しているのは『常陸国風土記』ですが、これは伝説とされています。

富士山は浮世絵でも有名です。葛飾北斎の『富嶽三十六景』、歌川重永の『不二三十六景』『東海道五拾参次』は様々な場所から見た富士山を描いています。ゴッホやモネ等海外の印象派の画家にも影響を与えました。近代では横山大観の『群青富士』等が富士山の作品として残っています。

松本先生はこのように、信仰の対象とされ、詩や絵画などの芸術を生み出した名山である富士山は、傑出した文化的景観であり、世界遺産として顕著で普遍的な価値を十分に有しているとご講演されました。

本稿は2011年6月4日現在のものです。なお、平成23年に平泉は世界文化遺産に登録され、さらに日本政府は平成24年1月27日に「富士山」と「武家の古都・鎌倉」の推薦書をユネスコに提出した。

〈秋季シンポジウム〉

「鎌倉のやぐらと石造文化財」

報告 2年 鎌倉 洋
1年 千崎 徹也

平成 23 年度秋季シンポジウムは 11 月 5 日土曜日に「鎌倉のやぐらと石造文化財」と題して次のような内容で開催された。

- ・東京文化財研究所保存修復科学センター修復材料研究室長朽津信明先生「中世の彩色文化財としてのやぐら」
- ・本学講師星野玲子「やぐらの劣化について」
- ・真言宗泉涌寺派準別格本山浄光明寺執事・什宝物調査整理係古田土俊一先生「鎌倉における中世石造物の様相—五輪塔を中心として—」
- ・本学教授河野眞知郎「やぐらは鎌倉に独特のものか—分布・存続年代・供養形態から—」

朽津先生は、基調講演として次のように述べられた。「やぐら」は岩窟（イワクラ）が訛ったもので、鎌倉を中心とする丘陵部に数千基あり、類似物はそれ以外の地域にも確認されている。文化財としてのやぐらは、鎌倉時代の人々が残した不動産遺産と捉えられるが、その内のいくつかは彩色されたものもあり、これらは古代の壁画から続く彩色文化財の一つである。そうした彩色文化財では、画家の使用する顔料と大工の使用する顔料とで違いが見出せる場合が多いが、やぐらに見られる顔料は、大工の使用する顔料の傾向に近い。ただし、分析点数が少ないため、慎重に検証を重ねる必要がある。しかし、やぐらは十分に保存されておらず、現状では彩色に関する類例調査は困難なものとなっている。

星野は、やぐらの劣化要因を次の 3 点に要約した。
① 温湿度の変化や風雨、構造上の歪み、地震や乗物による揺れなどの物理学的変化。
② 大気汚染による影響、塩類風化などの化学的変化。
③ 大木・植物・苔・シダ・地衣類の成長・繁殖・昆虫・小動物などによる生物学



的变化。このようにして進む劣化の保存対策として、樹木の伐採、やぐら内の清掃などによる周辺環境の整備、岩盤崩落防止の金網、コンクリート補強、支持柱・岩盤の強化処理を行う岩盤自体の強化、そして学術調査や急傾斜地保存対策に伴う緊急調査による記録化が必要であると述べた。加えて、これら文化財の保護・保存に関心を抱く者は、実際にその場に赴いて、そこを歩き、実物を見て何かを感じ取ることが重要である。

古田土先生は、鎌倉における石造塔の変遷と石工との関係を述べられた。14 世紀初頭以降、鎌倉で造立される石造物の中で五輪塔が突出した数に上り、鎌倉における最古の五輪塔は忍性の墓塔である。五輪塔は大日如來の三昧耶形で、漢訳仏典を基に日本で立体化・石造化されたものだが、使用された石材には伊豆箱根系安山岩と三浦層群凝灰岩がある。鎌倉及び周辺地域で産出する石質の柔らかい凝灰岩を利用した造塔が先にあり、後に導入された硬質加工技術によって安山岩の加工が可能になったと考えられる。しかし、安山岩を用いた造塔が行われるようになって、凝灰岩製五輪塔は造り続けられ、両者は当時の鎌倉において並存していた。

河野は、分布、存続年代、供養形態の検討から、やぐらが作られた地域を探った。やぐらは供養に利用されるため、出土する遺物とやぐらの作出年代に差が生じ、やぐらの製作年代の確定に出土遺物はあまり有効でない。また、存続年代を調べるにあたって、やぐら内部にある板碑や五輪塔の年号を参考にすると、やぐら付近にあったものを内部に入れた可能性もあるので年代が上下することがある。鎌倉以外の地にもやぐらに似たものはあるが、やぐらを用いる文化が鎌倉で始まったことは間違いない。しかし、鎌倉幕府滅亡後に、東京湾を挟んだ地域でやぐらを誰がどのように利用したのか、他方、やぐらの性格を把握するには、北関東にやぐらに比するような墓葬があるのかを確認する必要もある。

基調講演と報告後に本学准教授の宗墓秀明が司会を務めた討論は、時間的制約もあり、各発表者による補足説明を中心に行われた。

実習の感想

実習Ⅳ（国内）旅行記

岩橋 春樹

今年の実習Ⅳ（国内）は長崎方面を巡った。五島列島の福江島→長崎市内→平戸島、生月島というのが概略のコースである。8月22日から28日の間、計6泊7日の行程であった。参加学生は22名。引率教員は岩橋と石田先生。

古来、対外交流の最前線であった地域であり、国籍多様な人々の足跡、各種文化遺産が重層している。遣唐使、倭寇、日蘭交易、仏教、キリスト教等々。関東とは異質な歴史風土を体感するのが実習の趣旨である。

○五島・福江島

中国・唐に留学した弘法大師空海ゆかりの大宝寺、明星院といった古寺が現存する一方、堂崎教会などキリスト教会が島内に点在する。明人堂、六角井戸は倭寇（といっても中国貿易商主体の多国籍水軍）の遺跡。そのほか、福江城は海防のため幕末期に築城されたもので、三方が海に面した独自の構えとなっている。

○長崎① 出島

史跡については、整備保存と公開という二つの立場の兼ね合いがなかなか難しい。その点、出島は長崎観光の目玉としてのサービスにも配慮しながら、計画的な復元整備事業が進められている。担当の方から懇切な解説をいただき、発掘調査の現場も見学できた。配布された資料は充実したものであった。

○長崎② 夜のツアー

石田先生の特別見学行。長崎に滞在中、夜の食事後、有志参加である。とにかく長崎は坂道が多く、夜になっても蒸し暑いので岩橋はパス。翌日聞けば、ハードに歩き回ったようだ。

○佐世保

佐世保は旧海軍の要地であり、今は自衛隊と米軍が東シナ海方面ににらみをきかせる。現代軍事上の対外最前線である。自衛隊資料館では佐世保鎮守府はじめ海上自衛隊に関する資料を紹介している。海自OBのおじさんが薩摩なまりの迷調子で解説してくれた。

○平戸

大航海時代の城下町というのがキャッチフレーズ。長崎に先行して海外交易の拠点として栄えた。寺院と教会の見える坂は定番の平戸風景である。

オランダ商館倉庫を立派に復元し、異国風コスプレの女性ガイドを配置するなど、歴史観光に力を入れているようではあるが、ミニチュア版長崎といった水準に達していない。行政サイドが多彩な遺跡を総合活用できていない印象がある。

○生月島

捕鯨とキリシタン信仰で知られる島である。その生島の博物館「島の館」では、この二つの要素が展示の軸となっている。

キリシタン関係では、納戸神、聖母子のお掛け絵、オラショなどが要領よく紹介されている。土着的な趣が強いが、初期の信仰の形をそのままに継承してきた生島独自の様相が興味深い。通行のキリスト教とは全く無縁の世界である。

その後、殉教の遺跡であるダンジク様とガスパル様を訪ねる。ダンジク様は海辺の崖下に入り、汗を流しての降り昇り、お疲れさまでした。

○カラオケ大会

最後の夜は恒例のカラオケ大会を挙行了が、今年はいまひとつであった。一部の者を除き、全体に大人し過ぎる。とはいえ、Hの「天城越え」には脱帽。あまり巧いと周囲が委縮してしまうんだがなあ。

○大宰府天満宮

実習旅行の締めくくりとして大宰府天満宮に参拝。無事終了のお礼を申し上げる。

驚いたのは境内にあふれかえる中国と韓国のツアー客である。特に中国人はバス数十台に分乗した大軍団で、その人数たるや呆れ返るばかり。今も昔も九州は対外交流の地であることを実感したのであった。



出島発掘現場見学

平成23年度実習Ⅳ（海外）巡研報告

加藤 寛

平成23年度、文化財学科実習Ⅳ(海外)を9月1日(木)～8日(木)にかけて実施した。巡検先はイタリア北部のラベンナ、フィレンツェ、アッシジ、ローマで、各地に遺された文化財遺産の調査を行った。4世紀後半に分かれた西ローマ帝国最後の首都であるラベンナには5～6世紀にかけてのバジリカ様式の寺院内部にビザンチン文化を代表するモザイクが残されている。ラベンナはアドリア海に面した古都であり、ポポロ広場を中心に寺院が点在している。初めに訪れたサンターピレ教会では「コンスタンチヌス大帝と使徒たち」や「最後の審判」などのモザイクが壁面を埋め尽くしていた。裏庭にあるベストロネオニアニ礼拝堂では、ラベンナ最古の5世紀のモザイクの鑑賞と撮影を行った。また、ラベンナはフィレンツェを追われたダンテが「神曲」を著した場所であり、終焉の地でもある。ダンテが祈った教会とルネサンス時代に建てられたダンテ廟を訪れて墓参も行うことができた。そのほか、ラベンナ郊外にあるローマ時代のテオドリコの墓や新旧のサンタポリナレ教会を訪れラベンナ以前に建てられたバジリカ教会の威容を目の当たりにした。

ラベンナからフィレンツェまでは距離にして110km。高速道路を利用した2時間半のバスの旅である。途中、トスカーナの緩やかな丘陵が続き、ところどころに見え隠れする白い岩肌から、大理石の国イタリアを改めて感じた。フィレンツェでは、ウフィツ美術館、サンジョバンニ礼拝堂、サンタマリア・デル・フィオーレ教会を訪れ、ルネサンスの文化遺産を調査した。また、フィレンツェ在住の卒業生豊崎海氏の紹介でワインとトスカーナ料理を堪能し、地



フィレンツェ市庁舎前

元ならではの食文化に向き合うことができた。フィレンツェからローマに移動する途中、アッシジの聖フランチェスコ教会に立ち寄った。アッシジは聖フランチェスコ教会を中心とした中世の門前町で、岩山に沿って道が続き、町並みもオリジナルのままに遺されている。山上から見渡す風景はイタリアで一番とよばれるほど美しく、どこまでも広がる緑の平野に悠久の時間が流れているように思えた。聖フランチェスコ教会では、ルネサンスの巨匠ジオトーとその弟子たちによる壁画を鑑賞した。アッシジは約10年前の大地震で教会の屋根が崩落し、2階部分の礼拝施設を破壊した。当時、日本からも国際協力として大型の免震装置を空輸して、震災からの復興をサポートしたことが思い出された。

ローマでは、ローマ帝国の文化財を中心としてバチカン美術館、サンピエトロ寺院、コロッセオ、パンテオン、トレビの泉など日本でも馴染み深い遺跡を訪れた。当日、前イタリア首相の増税の発言から全国的なゼネストによるデモ行進のために、議会のあるナボナ広場などでは1日中デモ隊が埋め尽くしていた。その影響もあって、予定していたフォロローマノやコロッセオは外観だけの見学となった。

今回の巡検ではビザンチン、ルネサンス、ローマ時代などの研修を目的として、ラベンナやアッシジなど交通機関の関係からツアーを組めない場所も選んでみた。イタリア国内の移動をすべてバスにしたために実現できたコースであったと思っている。また、ツアーについている昼食と夕食をフリーにすることにより、参加者が自由にピザリアに入ったり無名のバルでパスタを食べたり、食文化についても研修できたことも印象に残った。



聖フランチェスコ教会

研究部会報告

江戸東京研究部会

江戸東京研究部会では「あるくと歴史がみえてくる」をモットーに近世の江戸、近代以降の東京に関わる地域を対象として巡検を中心に活動しています。

平成23年度は、2月15日(土)に行った第46回『畠山記念館「酒井抱一—琳派の華—」と増上寺下屋敷群巡り』のみの活動となりました。

作品の背景について知識を得てから展示に行きたいという要望があったため、2月13日(木)の例会の際、酒井抱一の生涯と増上寺下屋敷群の位置解説を行いました。当日は畠山記念館で14時より展示解説が行われ、1時間ほど鑑賞しました。酒井抱一代表作の「十二ヶ月花鳥図」「月波草花図」が展示されており、併せて、琳派の祖といわれる本阿弥光悦、俵屋宗達の作品も紹介されていました。

増上寺下屋敷群は畠山記念館近くにある、現在の最上寺、本願寺、常光寺、戒法寺、月窓院、光取寺、清岸寺を指します。江戸後期の絵図でも各寺院の正確な場所を記載しているものは少なく、観光名所としては認知されていませんでした。芝増上寺境内にあった子院(月窓院、隆崇院)や江戸時代初期芝周辺に創建されたものが移転、合併の繰り返しや戦災によって、創建当時の面影は特に見られませんでした。

部員の都合がなかなかつかず、予定よりも少ない活動数となりました。来年度は、部員の興味や関心を重視するとともに、活発な活動をしていきたいと思います。



古典芸能研究部会

私たちは、日本の古典芸能を中心に様々な体験や鑑賞を通して、伝統文化を学ぶ研究部会です。

平成23年度の夏の会は、8月6日に例年通り総持寺の紫雲臺をお借りして、東京成徳大学の青柳隆志先生の指導の下、装束体験を行いました。

体験内容は、甲冑・武家装束・法衣です。まずは着物や袴の畳み方を学び、各自一通りできるように練習しました。その後、武家装束の着付けを教わりました。先生に指導して戴きながらやるのですが、袴の着せ方が難しく何度も結び直しながら行いました。

次に甲冑です。甲冑は自分で着ることができないので、立った状態で順々に着せてもらいました。猛暑の中の体験だったので、全て着終わったころには暑さや重さに負けて座り込んでしまいました。この格好で戦に行っていたとは信じ難いです。

最後は法衣を着ました。法衣は、前々から着てみたいという要望が部員の中で多かったので、実現することができ嬉しく思います。場所がお寺だったのでとても雰囲気がありました。



宗教研究部会

私たち宗教研究部会は、立ち上げて間もない部会ですが、今年度は多くの新入部員を迎え、総勢22名という部員数で活動しています。

毎年参加しているのが、「キャンドルナイト」と「大船ゆめ観音アジアフェスティバル」という催しです。「キャンドルナイト」は毎年大船観音寺で行われているもので、広島原爆の残り火をキャンドルに灯して、世界平和を願うというものです。また、「大船ゆめ観音アジアフェスティバル」は仏教圏の国々の方が集い、文化交流をするというものです。私たち研究部会は、販売や裏方の作業を



しました。準備段階から様々な方と交流を持てたことは、今後の活動の視野を広げる良い機会となりました。

今年度は部員の意見を積極的に取り入れ、様々な計画を立て、昨年度以上に活動していこうと思いい、月に1回を目安に活動を行いました。事前に勉強会をし、最低限の知識を得てから活動を行いました。5月は東京国立博物館の「写楽展」、6月は明治神宮へ、7月は太田記念美術館の「歌川国芳展」へ行きました。自分の知らなかった場所へ行く良い機会になりました。

私たち宗教研究部会は、部員の意見を取り入れて活動をしているため、先に挙げた「キャンドルナイト」と「大船ゆめ観音アジアフェスティバル」以外の活動内容が、毎年異なります。以前行ったところでも、新しいところでも、どんどん部員の意見を取り入れることで、毎年新しい発見をすることができます。

来年度も様々な活動を企画するとともに、活動を通して部員一人ひとりが自らの課題を見つけることができるように取り組んでいきます。今後とも、宗教研究部会ならではの多彩な活動を繰り広げていければと考えています。

美術工芸研究部会

美術工芸研究部会では部員の想像力や知識を深めて、美術工芸品の鑑賞力を磨いていくことに重点を置いて活動しています。美術工芸品の観賞は様々な分野から多角的な視点でみることが重要です。巡検を通じて直接作品を鑑賞し、部会内で意見交換を行うことにより、美術工芸品を広い視野で捉えていきたいと考えています。

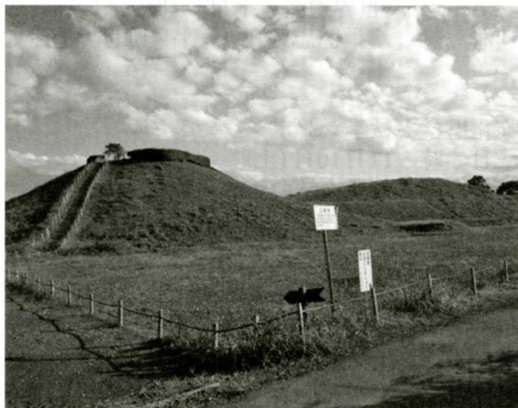
今後は主な活動である巡検を数多く企画して美術工芸品への鑑賞眼を養い、美術工芸研究部会の活動の場を広げていきたいです。

歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は、活動理念である「関東全域に目を向けた活動を基本理念とし、古代から中世を中心に歴史についてあらゆる方面からの研究を目指し活動を行う」を意識しています。この活動理念を基盤とし、関東だけでなく部員の興味に合わせて地域や時代に限定する事なく活動を行っています。特に、巡検に力を入れた活動を行っています。

今年度は、7月と9月の計2回巡検を行いました。1回目は、7月10日（日）に国立西洋美術館の企画展「大英博物館 古代ギリシャ展」の見学を行いました。そこでは、イギリスの大英博物館が世界に誇るギリシャ・ローマコレクションから厳選された彫刻、レリーフ、壺絵など約135点が展示されていました。人の身体の美しさがとてもよく表現されていました。2回目は、9月23日（金）に埼玉県行田市にある埼玉古墳群への巡検を行いました。埼玉古墳群は、稲荷山古墳、丸墓山古墳、二子山古墳、將軍山古墳、瓦塚古墳、鉄砲山古墳、奥の山古墳、中の山古墳、愛宕山古墳の9基の大型古墳が集中する東日本最大の古墳群です。稲荷山古墳と丸墓山古墳には登る事ができ、周囲の他の古墳を一望する事ができました。室内展示には、歴史の教科書にも載っている「国宝・金錯銘鉄剣」などがありました。

来年度は、今年度よりもさらに活発な活動を行っていきたいと思います。巡検の予定などは6号館地下の考古実習室前にあるホワイトボードに掲示しますので、興味がありましたらお気軽にご参加ください。また、巡検場所の希望も受け付けています。



鶴見大学文化財学会会則

1. 本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2. 本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3. 本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活性化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4. 本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5. 本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
 - 1 研究等の発表
 - 2 講演会の開催
 - 3 会誌・会報等の編集刊行
 - 4 研究部会活動
 - 5 HP上での広報活動
 - 6 親睦その他の事業
6. 本会に次の役員を置く
 - 1 会長（1名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
 - 2 委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営に携わり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
7. 本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
8. 本会の事務所は下記におく。

〒230-8501
神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号
鶴見大学6号館文化財学科合同研究室

平成24年度の年間行事予定

文化財学会総会および春季講演会

日 時 6月2日(土)

総 会 午後1時から

講演会 午後3時から

会 場 鶴見大学会館メインホール

テーマ 「世界遺産・平泉」(仮)

講 師 八重樫忠郎氏(元平泉町世界遺産推進室)

文化財学会秋季シンポジウム

日 時 11月10日(土)

会 場 鶴見大学会館メインホール

テーマ 「文化財学会と博物館」(仮)

連絡先

〒230-8501 神奈川県横浜市鶴見区鶴見2丁目1番地3号
鶴見大学 文化財学会

URL: <http://ccs.tsurumi-u.ac.jp/bunkazaigakkai/index.html>

E-mail: bunkazai@tsurumi-u.ac.jp

付 平成11年10月16日から発足する。

付2 平成16年4月1日 一部改正

付3 平成23年4月1日 一部改正

編集後記

今号の編集で得た経験をもとに今後の活動へ生かすことができればと思っております。またこの会報が文化財学会を知っていただくきっかけになれば幸いです。(伊藤記)

初めて会報の編集を担当させていただいて、最初は右も左も分からず不安で自分に出来るかどうかと心配していましたが、先輩方のお力添えのお陰で無事に終える事が出来ました。(小野記)

今年の変革の年でした。手探りのことも沢山ありましたが、遣り甲斐のある楽しい1年でした。今号より、新たに連絡先を載せました。文化財学会にご興味・ご質問などをお持ちの方は左記までお問い合わせ下さい。また、会報を刊行するにあたり、ご助力を賜りました皆さまにはこの場をお借りして篤く御礼申し上げます。(新井記)